



10年目のフーコー

フーコーを読むことのアポリア

三夏大平・フーコー・メソ

稲賀敏美
Inaga Shigenori

誰彼といった不死の固有名詞の群れが糺える繩となつて思考の系譜を描く。その誰彼と対決し、その系譜を塗り替えようとする抵抗の軌跡が、新たなる不死の固有名詞の生誕を約束する。呪縛の力学が織り成すこの虚妄の周辺には、不死の固有名詞をふと口にする事で、あたかも正当な権利をもってこの不死の仲間に加われると誤解したり、そうした誤解を嘲笑すればそれで休くなったように錯覚する、名もなき名詞群がさらに付符する。それが〈フーコー〉という固有名詞の周辺で、この10年に発生した事態だろう。

だが〈フーコー〉と皆から呼ばれ、その声の中心に居たはずの人は、思想史がともすれば纏ってきたこの運動から巧みに身を躲す。その著作では対決すべき固有名詞は意図的に抹消され、逆に忘却の淵から召喚された幾多の名詞群の洪水が、この人を特定の系譜へと位置づけることを不可能にする。〈フーコー〉という名前を口にし、かれを論じ、研究するという態度そのものが、その〈起源〉に置かれた作家によって拒絶されていた。思想の対象としてその著作〈を〉読むという忠実さは、それゆえにかえってフーコーを裏切り、フーコーに裏切られる仕組みとなっている。そこで人はフーコー〈とともに〉

考える、などと不遜にも口にする。だがそんなことがはたして可能か。

フーコーに沿ってフーコーを読む。ここにはひとつのアポリアがある。一個の著作家の固有性、一貫性ないしは矛盾は、通常ならば産出された真紙の手紙やお風付きのある発言を選別し、それを特有の社会環境における伝記的な足取りとして整理することで、理解可能なものにできると信じられている。だがそうした理解なるものの虚妄を暴露しつつけた思想家を理解するとはいかなることなのか。出来合いの思想史の枠組みのなかに〈フーコー〉を位置づけることは、この思想家の意図にたいする無理解を露呈する。といて反対にその意図に忠実であろうとすれば、〈フーコー〉の固有性や一貫性を解体することとなる。

この悪巧みに故人のあの金属的な洪笑を聞くロジェ・シャルティエ（「ル・モンド」1994年9月30日）。そこには、60年代末の知的高揚の残り火がみえる。ミシェル・ド・セルトーの美しい比喩を借りるなら、あたかも海浜の断崖の突端へと突き進んだ自動車さながらの、あの突き詰めた思索の緊張、〈自己〉破壊の淵に芽生える苛烈な問題意識。それを日本という場所で再燃させることは可能だろうか。